

# 印旛沼におけるトンボ類の生息実態調査

印旛沼の自然を守る会

宮崎 俊行

## 1. はじめに

印旛沼は、関東平野のほぼ中央、千葉県北部の下総台地の一角に位置し、千葉県最大の止水である。

今から約5,000年前の縄文前期には海水面が上昇し、印旛沼・手賀沼・霞ヶ浦などの一帯は香取海と呼ばれる海の入江であった。その後、海退により取り残され、淡水化してできたのが今の印旛沼である。

1950年代の印旛沼は、総面積26km<sup>2</sup>のW型をした大きな沼であった。1963年には、洪水防止・水田新規造成・水利用を目的として印旛沼総合開発計画が決定し、1969年には現在の約半分に縮小され、西と北の調整池に2分された。西印旛沼は5.3km<sup>2</sup>、北印旛沼は6.3km<sup>2</sup>の面積を持ち、両者は印旛沼捷水路で結ばれている。更に北印旛沼は長門川で利根川とつながり、西印旛沼は印旛放水路・花見川を経て東京湾と結ばれている。また、行政的には、佐倉市・成田市・八千代市・印旛郡印旛村・同本埜村・同栄町にまたがっている。

印旛沼は、以前から水質の悪い池沼として知られていた。ところが水道水の取水源として水質保全策が実施されている為か、現在では他の湖沼では既に絶滅してしまった動植物でも、辛うじて印旛沼に残っているものも知られる。しかしながら首都から50km以内であることから、周囲の開発が活発な昨今、このままではこの貴重な自然も失われる可能性がでてきた。そこで印旛沼を代表する水生昆虫としてトンボを採り上げ、その生息の実態を調査し、保全策を探ることとした。

## 2. 調査活動の概要・結果

印旛沼及びその周囲約2kmを調査範囲とし、1989年は5月8日～10月22日までの間13回、1990年は4月30日～9月23日までの間19回、都合32回行なった。

また、本活動は産経新聞（1989年6月27日付）やNHK総合放送（1989年9月1日）等で紹介された。

以下に本調査並びにそれ以前の記録、寄せられたデータから、確認できたトンボを列挙する。

## I. イトトンボ科

### (1) キイトトンボ

今回の調査では、印旛村鎌苅の廃田で1♀を確認したのみ。少ない。

### (2) ベニイトトンボ

1986年本埜村より石川一氏によって得られているが、その後確認できない。関東平野では、低地の古い池沼に生息するが、産地は激減している。

### (3) アジアイトトンボ

沼及び周囲の水田、廃田等に広く分布するが、余り多くはない。

### (4) アオモンイトトンボ

沼及び周囲の池など挺水植物の豊富な止水に生息。イトトンボの中では最も個体数が多い。南方系の種で、関東地方では、海岸沿いに産地が多い。

### (5) クロイトトンボ

沼本体等のヒシやガガブタ等の浮葉植物が繁茂する所に見られる。

### (6) セスジイトトンボ

沼本体、周囲の池等比較的広く分布するが、必ずしも多くはない。

### (7) ムスジイトトンボ

秋口に沼で見られたが稀である。アオモンイトトンボ同様に南方系で、関東平野では海岸沿いに産地が多い。

### (8) オオイトトンボ

少ない。今回の調査では沼には見られず、本埜村の緩流から幼虫が得られた。

### (9) オオセスジイトトンボ

沼及び、周囲の池のマコモ・ヨシの繁茂する部分に見られるが産地は限られる。国内での分布は限られ、関東・越後・秋田・津軽・仙台の各平野のマコモ等の繁茂する古い池に見られる。関東では激減しており、他に産地を求めることは難しい。

## II. モノサントンボ科

(10) オオモノサントンボ

沼及び周囲の池に見られる。前種同様国内では特異な分布を示し、関東・越後・仙台の各平野にのみ、ヨシ・マコモの群生する古い池沼から知られる。現在のところ前種よりは多産する。

Ⅲ. アオイトトンボ科

(11) アオイトトンボ

本埜村甚兵衛では多産するが、その他では少ない。5・6月に羽化するが繁殖行動は秋に行なわれる。

(12) オオアオイトトンボ

沼周辺の樹林に囲まれた池や水溜りに発生する。6月頃羽化し、夏期は林の中で過ごし、秋に水域に戻る。

Ⅳ. カワトンボ科

(13) ハグロトンボ

沼の周囲の丘陵の谷を流れる細流に生息するが、近年の河川改修の影響を受けたのか稀である。本埜村の2カ所で確認できたのみ。

Ⅴ. サナエトンボ科

(14) ナゴヤサナエ

端山ら(1980)は、ヤマサナエ属の一種として手操川産の本種幼虫の写真を示している。本来大河川の中下流域に生息する種である。

(15) キイロサナエ

本埜村の細流で、1990年6月24日に1♂が得られたのみ。近年千葉県下からは記録されていなかった。

(16) ウチワヤンマ

摂食期には周囲の丘陵地の水田等で見られるが、成熟した♂は沼に戻り縄張を持つ。

Ⅵ. オニヤンマ科

(17) オニヤンマ

周囲の丘陵地の細流に見られる。7・8月頃には谷津の最も奥の開けた空間を群飛するが、♂は9月に入ると細流上を低く飛んで♀を捜す。

VII. ヤンマ科

(18) サラサヤンマ

印旛村鎌苅で1♂目撃したのみ(松木)。

(19) アオヤンマ

5～7月に沼などのヨシの密生した場所に生息する。

(20) ヤブヤンマ

本埜村の丘陵地で、黄昏飛翔中の個体が観察された。少ない。

(21) マルタンヤンマ

成田市坂田ヶ池で黄昏飛翔中の個体が観察されたが、稀。

(22) クロスジギンヤンマ

春、周囲の丘陵地の樹木に囲まれた池等で見られる。

(23) ギンヤンマ

分布は広いが、個体数は少ない。

VIII. エゾトンボ科

(24) オオヤマトンボ科

沼や坂田ヶ池などで見られる。♂は岸に沿ってパトロールする。

IX. トンボ科

(25) ハラビロトンボ

沼に付属した比較的明るい湿地に見られるが、産地は限られる。

(26) シオカラトンボ

各地に普通。

(27) オオシオカラトンボ

夏、丘陵地に生息する。多くはない。

- (28) シオヤトンボ  
春、丘陵地に生息する。
- (29) ベッコウトンボ  
井原(1984)によって、印旛沼から記録された。1988年までは、西印旛沼の一部に生息していたが、その後見られず生息が危ぶまれる。本種は、国内では宮城から鹿児島までの各県から記録されているが、現在では静岡県磐田市桶ヶ谷沼を除いては、確実な生息地がないと言われている。関東以北では、印旛沼が最後まで残っていた生息地であった。
- (30) ショウジョウトンボ  
沼及び各地に見られるが、多くはない。
- (31) コフキトンボ  
各地に普通。摂食期・夜間も水域を離れない。
- (32) アキアカネ  
各地に普通。夏期を除く6～11月に見られる。
- (33) ナツアカネ  
各地に普通。6～11月に見られる。夏期は周囲の林の中に入る。
- (34) ノシメトンボ  
各地に普通。夏期は周囲の林の林縁に移る。他のアカネより早く8月下～9月上旬には水域に戻る。
- (35) コノシメトンボ  
栄町から得られているが稀。
- (36) マイコアカネ  
沼及び周囲の池沼から知られる。ノシメトンボと並んで沼を代表するアカネである。
- (37) マユタテアカネ  
周囲の丘陵地から知られる。場所によっては多産する。
- (38) コシアキトンボ  
沼などに普通。摂食期は周辺に移動して群飛する。
- (39) チョウトンボ  
沼などに見られる。群飛することがある。

(40) ウスバキトンボ

南方からの飛来種である。

以上、今回の調査を中心として40種類を列挙したが、この他にもこの地域からは次の種が記録されている。

モートナイトトンボ（佐倉(井原, 1984)）、ホソミオツネトンボ（佐倉(井原, 1984)）、コバネアオイトトンボ（栄町・本埜村(枝, 1965)）、トラフトンボ（栄町(枝, 1967)）、ミヤマアカネ（佐倉(枝, 1963)）、リスアカネ（佐倉(井原, 1984)・成田(枝, 1963)）、オオキトンボ（本埜村(枝, 1965)）、ハネビロトンボ（佐倉(井原, 1984)）、合計8種。

このうちコバネアオイトトンボ、トラフトンボ、オオキトンボの3種は既に絶滅したと考えられるが、残りについては再確認される可能性がある。

以上過去に記録されたものまで含めると、印旛沼周辺からは、48種が記録されている。

### 3. むすび

平野部の自然は高山などとは異なり、人間の営みが隣接して行なわれていることから、環境の変化を受け易い。印旛沼もその例外ではなく、干拓により面積が半減し、富栄養化している。しかしながら、関東地方では絶滅に近いオオセスジイトトンボやオオモノサシトンボが生息し、極く最近までベッコウトンボが確認できたことは、まだまだ貴重な自然が残されていることを物語っている。だが、こうした貴重な種が残っている場所は沼に限られた部分でしかない。その様な場所の特徴を挙げると、

1) ヨシ、マコモ等の挺水植物が広く茂る所

湖中央の開水面の水質が悪い場合でも、これらの群落中の水は透明で、オオセスジイトトンボやベッコウトンボも、この様な場所で見られた。

2) 沼に隣接して、草原や林がある所

現在の沼は、沼・堤防・用水路・水田・林の順に区切られており、厳密な意味で沼・草原・林の三者が連なっている場所はない。水域ばかりでなく、こうした場所は成虫が暮らす上で必要である。

3) 小さな水域が点在する変化に富んだ所

沼本体は魚等、幼虫の捕食者も多い。そこで外敵の少ない小さな水域が、様々なバ

ターンで存在することが、多種のトンボが生息する上で好ましい。

これらの条件を満たし、トンボの生息に適する場所として、佐倉市土浮付近、印旛村鎌苅付近、同川端付近の印旛沼、印旛村師戸の用水路、同萩原の池、本埜村甚兵衛、同中根の池、成田市坂田ヶ池、佐倉城趾などが挙げられ、その環境保護が望まれる。

#### 4. 謝辞

日頃御指導頂いている朝比奈正二郎博士、精力的に調査頂いた松木和雄氏、貴重なデータを寄せられた石川一氏、調査に協力頂いた新井裕、長田純子、増田和人、松木由起子、松木綾乃の諸氏に厚くお礼申し上げます。

#### 5. 文献

- 井原英俊（1984）ふるさと佐倉の生物 トンボ・チョウ・カエル編。136pp. 自費出版。
- 印旛沼環境基金（1987）印旛沼白書——昭和62年版。169pp. 同基金、佐倉。
- 枝重夫（1963）千葉県の蜻蛉 第1報。千葉県動物誌基礎資料，2：15-34。
- （1965）千葉県の蜻蛉 第2報。千葉県動物誌基礎資料，4：27-38。
- （1967）千葉県の蜻蛉 第3報。千葉県動物誌基礎資料，6：43-56。
- 端山重男他（1980）佐倉市河川の生物。241pp. 佐倉市。



写真1 ベッコウトンボ♀ (佐倉市印旛沼 1988年5月10日)



写真2 オオセスジイトンボ♀ (印旛村 川端 1990年6月17日)





写真3 オオモノサシトシボ♀ (印旛村 師戸 1990年6月23日)

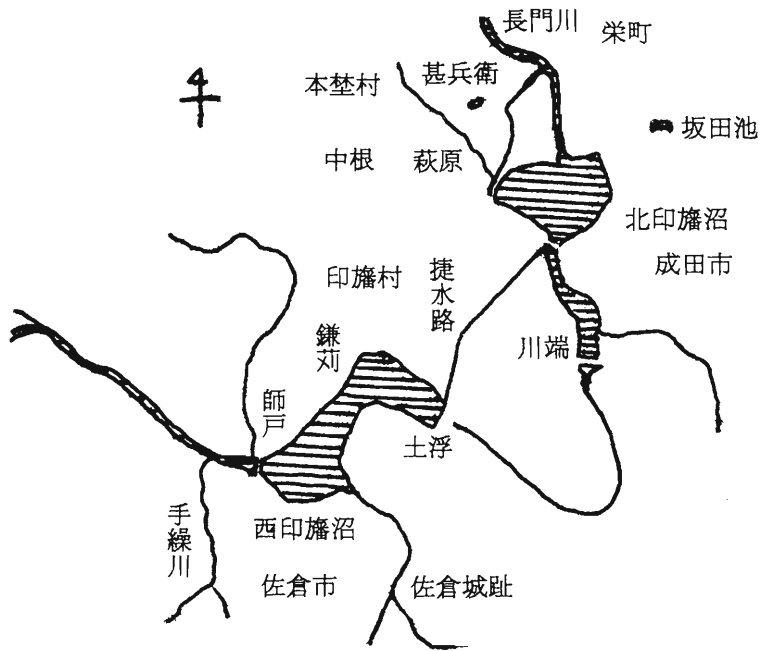


図1 印旛沼概略図